

④文章にまとめる

1.はじめに

2025 年 5 月公開された「デジタルアーカイブ戦略 2026-2030」において、大学や大学図書館の役割として「学術研究に関するアーカイブも含めた、学術資産その他のデジタルアーカイブを積極的に推進」（知的財産戦略本部、2025、p.10）することが求められている。

「戦略」に即して大学図書館がデジタルアーカイブ推進するにあたり、著作権処理が発生し、また公開が容易な資料として貴重資料がまず挙げられる。貴重資料は本稿において「複製・改作が困難な資料」（注 1）と定義する。こうした貴重資料は代替がきかない資料であることや、年代が古く劣化が進んできたことなどから、デジタルアーカイブ化により画像アーカイブなどを利用することで解消できるのである。

また、デジタル化資料をオンラインで提供する場合の公開手段は、機関リポジトリが 81 校、デジタルアーカイブが 47 校、OPAC が 38 校、学外サービスが 30 校となっている。公開手段別の合計は資料のデジタル化を行った私立大学の合計より多いため、各大学は自機関前行物を機関リポジトリ、貴重資料をデジタルアーカイブでそれぞれ公開するという

2.大学図書館の貴重資料デジタル化とデジタルアーカイブに関する状況

まず「令和 6 年度学術情報基盤実態調査」（注 1）から貴重資料に関するデジタル化の現状を概観すると、令和 5 年度に資料のデジタル化を行った私立大学は 129 校（私立大学全体の 20.5%）で、うち貴重資料は 11,070 点で資料種別区分の合計 22,138 点の半数を占めており、最も多くデジタル化されている。

また、デジタル化資料をオンラインで提供する場合の公開手段は、機関リポジトリが 81 校、デジタルアーカイブが 47 校、OPAC が 38 校、学外サービスが 30 校となっている。公開手段別の合計は資料のデジタル化を行った私立大学の合計より多いため、各大学は自機関前行物を機関リポジトリ、貴重資料をデジタルアーカイブでそれぞれ公開するという

統計を使うと客観的な記述がしやすい

3.専修大学図書館のデジタルアーカイブによる貴重資料公開手法

専修大学図書館の貴重資料コレクションは図書館ホームページ「コレクション紹介」（注 2）から確認することができる。デジタルアーカイブとしては、向井信夫文庫（江戸期和本）を国書データベース（注 3）で、同文庫（浮世絵）を専修大学図書館「向井信夫文庫」浮世絵データベース（注 4）で公開している。専修大学図書館「向井信夫文庫」古典籍閲覧システム（注 5）で国書データベース上の向井信夫文庫（江戸期和本）のみに限定して検索することができるが、ARC リサーチスペースに関する赤間の解説を参照すると、ARC 古典籍ポー

他人の文章を要約して引用した場合は
そのことがわかるような書き方
（誰々によると…など）をして、
マルカッコで著者名・発行年・ページを書く

6.おわりに

専修大学図書館と明治大学図書館のデジタルアーカイブによる貴重資料公開手法の比較により、貴重資料の活用のためにデジタルアーカイブが備えるべき条件の抽出を行った。比較結果を整理して得た条件は以下である。

- ①分野の代表的なデジタルアーカイブシステムに連携すること
- ②二次利用条件がパブリックドメインであること
- ③未公開の所蔵資料を今後公開できる拡張性があること

高久は、デジタルアーカイブのコンテンツが増加する中、資料の利用者層はこれまでの一定の訓練を受けた専門家から、一般の市民や学生、学校教育の児童生徒といったさまざまな主体に広がっていくことを指摘している（高久、2025、p.74）。専門家でない利用者の目にも触れるためには、代表的なデジタルアーカイブシステムから検索可能であることは有利に働き、また二次利用がしやすいことは類似資料からある一点を選ぶ動機にもなるだろう。さらに、西洋古典籍など分野の代表的なデジタルアーカイブがない資料も大学図書館は所蔵しており、そうした資料の公開に向けた拡張性も備えることが望ましい。

今回、メタデータについては調査の対象にできなかったが、今後はメタデータの項目やインターフェースも含め、大学図書館が所蔵する貴重資料の活用のためにデジタルアーカイブはどのような要素を持つべきかを検討していきたい。

デジタルアーカイブ
(永蔵目 1 時限)

2025 年 7 月 16 日 (水)

枚数が多いときは表紙をつける
タイトル・所属・名前忘れずに

大学図書館のデジタルアーカイブによる貴重資料公開手法の検討
--専修大学図書館と明治大学図書館の比較から--

文学部ジャーナリズム学科
LM24-1234A
専修 センペン

デジタルアーカイブ（注 8）を公開した。図書館から文藝文庫、黒川文庫とその他の古典籍、西洋古典籍の二次利用条件については、デジタルアーカイブ計画段階で「オープンアクセス」の方針にもできる限り準じて（植木、2023、p.147）と認識していたとあり、パブリックデータは所蔵機関名の明示とともに無償で利用できる。パブリックドメインでない資料は見えず、ほとんどは植木によると明治大学デジタルアーカイブは「3 機関」とともに、将来は「学内他機関・他部署からの収集本、2023、p.150）、多様な資料を一つのシステムで提供する。一方、公開している古典籍は国書データベースや交換がないものと思われる。

5.デジタルアーカイブによる貴重資料公開手法の比較結果

専修大学図書館と明治大学図書館のデジタルアーカイブによる貴重資料公開手法について表 1 にまとめた。

表 1：専修大学図書館・明治大学図書館のデジタルアーカイブの比較		
	専修大学図書館	明治大学図書館
デジタルアーカイブシステム	国書データベース 専修大学図書館「向井信夫文庫」古典籍閲覧システム ARC 浮世絵・日本絵画ポータルデータベース 専修大学図書館「向井信夫文庫」浮世絵データベース	明治大学デジタルアーカイブ
他システムとの連携	国書データベース ジャパンサーチ（ARC 経由）	なし
二次利用条件	国書データベースで All-Rights-Reserved 表示。掲載などは書類による申請を要する。	パブリックドメインで公開
未公開資料（コレクション）を今後公開できる仕組み	古典籍、浮世絵以外を公開するデジタルアーカイブはない。	コレクションの内容を問わず公開できる。学内他部署にも拡張できる。

専修大学図書館の優れている点は、国書データベースや ARC 古典籍ポータルデータベース、ARC 浮世絵・日本絵画ポータルデータベースと連携することで各分野の代表的なデジタルアーカイブから検索可能となることである。一方、二次利用に申請が必要であり、利用上の難癖になることが考えられる。また、現在参画しているデータベースでは古典籍と浮世絵（絵画資料）以外は取り扱わないため、西洋古典籍などをデジタルアーカイブ化するには別のシステムを利用する必要がある。

明治大学図書館は継進によってデジタルアーカイブを公開したが、パブリックドメインの資料が多く、二次利用がスムーズであること、コレクションの内容を問わず公開できる点がある。一方、現在連携しているデジタルアーカイブがなく、資料にたどり着きにくい点に課題が残る。

最後に参考文献リストをつける

【参考文献】

- 赤間亮（2023）「デジタル・ヒューマニティーズとデジタルアーカイブ」鈴木親彦責任編集『共振するデジタル人文学とデジタルアーカイブ』（デジタルアーカイブ・ベーシックズ：2-2）p.3-24、勉誠出版
- 植木正真（2023）「明治大学デジタルアーカイブシステムの導入検討について」『図書の譜：明治大学図書館紀要』27、p.143-151
- 高久雅生（2025）「デジタルアーカイブを取り巻く情報探索の課題とポイント」『デジタルアーカイブ学会誌』9（2）、p.74-75
- 知的財産戦略本部（2025）「デジタルアーカイブ戦略 2026-2030」https://www.kantei.go.jp/jp/singi/titeki2/pdf/archive_2026-2030.pdf（参照：2025-7-1）

【注】

- 文部科学省（2025）「令和 6 年度学術情報基盤実態調査」10.電子図書館の機能 <https://www.e-stat.go.jp/stat-search?page=1&toukei=00400601&kikan=00400>（参照：2025-7-1）
- 専修大学図書館ホームページ「コレクション紹介」<https://www.senshu-u.ac.jp/library/collection/>（参照：2025-7-1）
- 国書データベース（専修大学図書館画像一覧）<https://kokusho.nijl.ac.jp/page/list-sulm.html>（参照：2025-7-1）
- 専修大学図書館「向井信夫文庫」浮世絵データベース https://www.dh-jac.net/db/nishikie/search_senshu.php（参照：2025-7-1）

参考文献リストの書き方

図書： 著者名（出版年）『本のタイトル』 出版者名
複数著者による図書（論文集など）の一部にあたる論文や章： 著者名（出版年）「論文・章タイトル」 編者名『本のタイトル』 論文・章のページ数 出版者名
雑誌論文： 著者名（発行年）「論文タイトル」『雑誌タイトル』 巻号 ページ
WEB上の文書： 著者名（公表年もしくは最終更新年）「文書タイトル」URL（参照日付）
新聞記事： 「記事タイトル」『新聞タイトル』 発行年月日 朝夕刊 ページ

※引用・参考文献リストの書き方（要素や順序）は分野などによりさまざまです。
先生の指定と『知のツールボックス』『SISTO2：参考文献の書き方』などを参考にしましょう。